

## 児童の意識調査を通じた学校行事に関する一考察 —運動会と修学旅行を中心として—

藤井 佑介(長崎大学大学院教育学研究科)

森 輝美(諫早市立湯江小学校)

### I. 背景と目的

近年、産業社会から知識社会へと時代が革新的かつ急速に変容をしている。そのような中で、少子化や核家族化、情報化の進展に伴い、子ども達の人間関係の希薄化と社会性を身につける直接的な体験活動の減少は大きな問題となっている。これからの時代を生き抜いていく子ども達には、他者とコミュニケーションを図る力や協働する力を身につけていくことが必要とされ、主体的に社会参画をし、複雑な事象に対する問題解決を行っていくことが求められる。

学校教育においては、特に特別活動を通して、望ましい集団活動や実践的・体験的な活動を実現することを目指している。実際に、現行の学習指導要領においても特別活動の目標として「望ましい人間関係を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」と示されており、集団活動や「なすことによって学ぶ」といったことが指導の本質とされている。次期学習指導要領に関する中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016)においても、特別活動は様々な構成の集団から学校生活を捉え、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して行われる活動の総体として位置付けられており、学年や学校段階が上がると共に活動を広げ、社会に出た後の様々な集団や人間関係の中で育まれた資質・能力が生かされていくことが必要だとされている。

特別活動は主に「学級活動」「児童(生徒)会活動」「クラブ活動」「学校行事」で構成される。これらのうち、本研究では特に学習者の印象に残りやすいとされる学校行事に着目した。さらに、学校行事の中でも小学6年生が中心となって活動する運動会と修学旅行に焦点を当てた。実際に、運動会においては異学年合同の活動となり、最高学年である6年生がリーダーシップをとって進めていくことが多い。「主体的な学びや対話的な学び、深い学び」の実現やコミュニケーション能力の重要性が提唱されている中で、6年生が運動会や修学旅行を始めとする学校行事をどのように捉えているかを明らかにすることは、今後の特別活動を考えていくにあたって重要な観点となる。特別活動においては学校独自の文化の継承に加え、学校単位でカリキュラムマネジメントを行っていく必要性も出てくる。現在の小学6年

生が学校行事をどのように捉え、意識することで今後の学校行事のあり方を考える資料となると言える。これまでの学校行事に関する研究としては集団社会化理論から教師の関わりを分析した研究（河本, 2015）やソーシャルスキルを活用した指導モデルの開発（金子, 2009）等が挙げられ、指導者である教師の取り組みや評価のあり方に関わるものが多い。さらに、学習者である子どもの意識調査においては友人関係と学校行事との関連について分析した研究（長谷川, 2012）や高等専門学校を対象にした研究（渡辺, 2015）が挙げられるが、これらは中学校や高等学校を対象としており、小学校を対象とした調査は少ないと言える。小学校を対象とした意識調査研究としては玉井ら（1995）の研究が挙げられ、比較的に関わりが密接になりやすい僻地の小規模学校を対象としている点に特徴があると言える。

そこで、本研究では小学校6年生128名を対象に運動会と修学旅行を中心とした意識調査を行い、学校行事が持つ意義について考察することを目的とした。

## II. 学校行事の目的とねらい

本研究で学校行事を扱う上で、ここでは運動会と修学旅行を中心として、その目的と狙いを整理する。

まず、現行の学習指導要領における学校行事の目標は、「学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。」とされている。さらに、内容については「全校又は学年を単位として、学校生活に秩序と変化を与え、学校生活の充実と発展に資する体験的な活動を行うこと。」と示されている。学校行事を通して育てる能力は表1の通りである。

表1 学校行事を通して育てる力（指導要領解説より）

<ul style="list-style-type: none"> <li>○学校生活を豊かで実りあるものにするという共通の目標に向かって、自らを律し、協力し、信頼し、励まし合い、切磋琢磨し、喜びや苦労を分かち合うような人間関係を築こうとする態度</li> <li>○学校への愛着、学校の一員としての自覚や仲間意識などの集団への所属感や連帯感</li> <li>○郷土の伝統や文化、地域社会の生活や人々と積極的にかかわり、自分の役割を自覚し、自らを律するとともに、自己を生かし、協力しながら進んで役に立とうとするなどの公共の精神</li> <li>○学校生活の充実と向上のため、お互いの力を合わせ互いに役割や責任を果たし合おうとすることについて、児童自身が意識して努力するなど、自らが主体的に取り組むなどの自主的・実践的な態度</li> </ul>
---

内容や表1からもわかるように、学校行事は、全校や学年で同一の目標に向かって、行われる活動である。学校行事は日常の教科の授業では経験できない学びであり、積極的に参加

をし、役割や責任を果たし目標を成し遂げ、ともに喜びや苦勞を共有する活動である。

また、学習指導要領では学校行事を「儀式的行事」、「文化的行事」、「健康安全・体育的行事」、「旅行・集団宿泊的行事」、「勤労生産・奉仕的行事」の5つに大別している。本研究で焦点を当てる運動会は「健康安全・体育的行事」、修学旅行は「旅行・集団宿泊的行事」に位置付けられる。「健康安全・体育的行事」のねらいは「心身の健全な発達や健康の保持増進などについての関心を高め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動を行うこと。」とされており、「旅行・集団宿泊的行事」のねらいは「自然の中での集団宿泊活動などの平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、人間関係などの集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと。」とされている。それぞれの教育的意義は特別活動自体の意義に準ずる形となり、運動会は同学年または、異年齢集団による実践的な活動の中で、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上、思いやりの心や自律・自制の心など豊かな人間性や社会性の育成が求められていることにあると言える。さらに、修学旅行においては、校外の豊かな自然や文化に触れる体験を通して、学校における学習活動を充実発展させると共に、校外における集団活動を通して、教師と児童、児童相互の人間的な触れ合いを深め、楽しい思い出をつくること、加えて、集団生活を通して、基本的な生活習慣や公衆道徳などについての体験を積み、互いを思いやり、共に協力し合ったりするなどの人間関係を築く態度を育てることが挙げられる。

### Ⅲ. 方法

調査対象は長崎県 X 小学校 6 年、128 名（4 クラス）、調査時期は 2015 年 10 月であった。

本研究では、学校行事に関する児童の意識を明らかにするため、質問紙を用いた調査を行った。なお、質問紙を作成する際、国立教育政策研究所(2011)の評価項目を参考とした。質問紙による評価は質問項目への回答と自由記述による回答の2種類を行った。回答者は、各質問項目に対して「はい」「いいえ」「わからない」から選択して回答した。分析では、各質問項目の回答者数をそれぞれ算出し、人数の偏りについて  $\chi^2$  検定を行った。なお、自由記述については、質問項目における選択理由や学校行事の意義をどのように捉えているかを明らかにするために活用した。

### Ⅳ. 結果

まず、運動会に関する調査の有効回答は 128 件であった。調査結果は表 1 の通りである。

表1 運動会についての調査結果

質問項目	はい(人)	いいえ(人)	わからない(人)	合計
運動会は好きか	79	23	26	128
友達と協力できたか	112	0	16	128
積極的に行動できたか	80	12	36	128
安全に練習できたか	113	3	12	128
運動が好きになったか	84	21	23	128
集団行動の大切さが分かったか	105	3	20	128

「運動会は好きか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=46.520, p<.01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p<0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p<0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」は同等であった ( $p>.05$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「運動会は好きか」という質問に対して、その理由を自由記述によって調査した。その結果、以下のような意見が挙げられた。まず、「はい(好き)」と回答した理由については、主に「友だちと競争できるから」、「友だちと協力するから」、「達成感を感じられるから」、「年に一度このクラスで一回しかできないから」、「思い出に一番残るから」、「チームワークが深まる」、「他の学年とも仲良くできるから」、「地域の人に頑張っている姿を見せられるから」といった意見が挙げられ、仲間との協力や異学年での交流の意義、達成感や楽しさを感じることがその要因だといえる。また、「いいえ(嫌い)」と回答した理由については、「運動がきらいだから」、「個人の種目で最下位だったとき、恥ずかしいから」、「練習がきつい」、「団体競技で足を引っ張ると周りの目が怖いから」といった意見が挙げられ、個人的に運動が苦手であることや、チームの中でできない自分に責任を感じる、といったことが要因であることが明らかになった。なお、「わからない」と回答した理由については、「好きな競技もあるし、きらいな競技もある。」、「個人競技はきらい」、「盛り上がることは好きだけど、運動はきらい」といった意見が挙げられた。

「友達と協力できたか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=172.017, p<.01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p<0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p<0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p<0.0002$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「積極的に行動できたか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=55.756, p<.01$ )。「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p<0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p<0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p=0.0008$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「安全に練習できたか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=$

174.877,  $p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」は同等であった ( $p = 0.0384$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「運動が好きになったか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 60.115, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」は同等であった ( $p > .05$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「集団行動の大切さが分かったか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 139.998, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p = 0.0008$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

また、「運動会でどのような力が身についたか (自由記述)」については、多数意見として「協力の大切さ (48名)」、「集団の力・チームワーク (21名)」、「あきらめない力 (10名)」、「人と合わせる力 (10名)」等が挙げられた。少数意見として「集中力 (1名)」、「決断力 (1名)」、「自信 (1名)」が挙げられた。この結果から、多数の児童が他者との関わりに関しての述べており、少数意見は個人に関することだということがわかる。つまり、運動会において児童が身についたと考える力は個人に関わる力ではなく、集団における他者との関係調整力であると判断できる。従って、運動会は集団での規範を育成するという点において有効な活動であると言える。

次に、修学旅行に関する調査の有効回答は 124 件であった。調査結果は表 2 の通りである。

表 2 修学旅行についての調査結果

質問項目	はい(人)	いいえ(人)	わからない(人)	合計
修学旅行は楽しかったか	116	3	5	124
計画など積極的に取り組んだか	96	5	23	124
友達と協力できたか	112	1	11	124
交通などマナーやきまりを守れたか	109	5	10	124
修学旅行先の文化や自然に興味をもったか	97	7	20	124

「修学旅行は楽しかったか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 202.391, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」は同等であった ( $p > .05$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「修学旅行は楽しかったか」という質問に対して、その理由を自由記述によって調査した。その結果、以下のような意見が挙げられた。まず、「はい（楽しかった）」と回答した理由については、「ホテルでの時間」、「見学の時間」、「ともだちと過ごした時間」、「友だちと今まで以上に仲良くなったこと」、「友だちと計画を立てる時間」、「友だちの知らなかった所を知ったとき」、「普段できない体験」といった意見が挙げられ、友達との関係の深まりや新たな姿の発見、普段できない体験をできたということが楽しさの要因であったといえる。また、「いいえ（楽しくなかった）」と回答した理由については、「仲がいいともだちと行動できなかったから」や「ホテルの備品を壊して怒られたから」といった意見が挙げられた。なお、「わからない」と回答した理由については、「楽しい時間もあったけど、楽しくなかった時間もあった。」という意見が挙げられた。

「計画など積極的に取り組んだか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 112.382, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p = 0.0012$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「友達と協力できたか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 182.454, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p = 0.0094$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「交通などのマナーやきまりを守れたか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 166.484, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」は同等であった ( $p > .05$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

「修学旅行先の文化や自然に興味をもったか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2) = 114.511, p < .01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p < 0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p < 0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p = 0.0208$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

また、「修学旅行を通して何を学んだか（自由記述）」については、「協力することの大切さ（24名）」、「体験活動に関する内容（14名）」、「出会いや人との関わり（12名）」、「友達の大切さ（11名）」、「人の優しさ、優しくすることの大切さ（11名）」、「旅行先の歴史や文化（7名）」、「地域の特徴の違い（7名）」、「自然環境の大切さ（7名）」、「臨機応変に行動すること（4名）」、「ルールやきまりの大切さ（3名）」等が意見として挙げられた。

最後に、学校行事に関する調査の有効回答は 124 件であった。調査結果は表 3 の通りである。

表 3 学校行事に関する調査結果

質問項目	はい(人)	いいえ(人)	わからない(人)	合計
学校行事は好きか	93	6	25	124

「学校行事は好きか」について  $\chi^2$  検定を行った結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(2)=101.252, p<.01$ )。ライアンの名義水準を用いた多重比較によれば、「はい」と「いいえ」の間に有意差があった ( $p<0.0002$ )。また、「はい」と「わからない」にも有意差があった ( $p<0.0002$ )。さらに、「いいえ」と「わからない」も有意差があった ( $p=0.0012$ )。従って、「はい」の回答数は「いいえ・わからない」の回答数よりも多かったといえる。

また、「学校行事について好きな活動は何か(自由記述)」については、「小大会(25名)」、「修学旅行(21名)」、「地域全体で行うフェスタ(19名)」、「運動会(17名)」、「遠足(13名)」、「地域清掃(5名)」、「縦割り活動(3名)」、「持久走大会(2名)」、「文化的行事(2名)」という結果が得られた。加えて、その理由として、「誰かの役にたてる実感がもてる」、「自分が好きなことができる」、「他学校・他学年・他クラスと交流できる」、「普段の生活では体験できないことができる」、「ともだちと協力できる」、「練習の成果が出せる」といった意見が挙げられた。

以上の結果より、X 小学校における児童は学校行事を好意的に捉えており、特に「小大会」や「修学旅行」「運動会」といった活動に関しては、多数の児童が支持していると言える。

## V. まとめと課題

本研究では、小学校における学校行事、特に運動会と修学旅行に関する意義を考察することを目的とし、小学校 6 年生 128 名を対象に質問紙調査を行った。

調査の結果、児童の意識として以下のことが明らかになった。

まず、運動会においては、ほとんどの児童が好意的に捉えており、他者との協力や、集団行動の大切さの理解など、集団で活動することに意義を感じていると言える。また、安全面についても配慮をされており、運動を好むようになるということが示唆された。ただし、仲間と協力しなければならないからこそ、運動が苦手な児童にとっては責任を感じてしまうこともあるといった、一面も明らかになった。

さらに、修学旅行においては、X 小学校の児童たちは修学旅行を楽しいと捉えており、計画的に取り組むことや規範を守ること、人と協力することに意義を感じている。特に、修学旅行の教材的内容ではなく、人との関わりや出会い、協力といった他者との繋がりが重要視されている。つまり、児童にとって修学旅行は旅行先の文化や自然だけでなく、それを通して出会う友達の新たな姿や関係の構築に価値を見出すということが明らかになった。

最後に、学校行事に関しては、児童のほとんどが肯定的に捉えていることが明らかになった。「小大会」が多数の支持を得たが、これは調査時期が小大会直後であったことがその要因であると考えられる。運動会や修学旅行の他にも清掃活動や地域と連携する行事等が挙げられ、縦割り活動であることや希少な体験ができること、自己有用感を持てることに意義を感じていることがわかった。

以上のことより、小学6年生における学校行事の意義は、主に「協力」、「集団行動」、「様々な他者との出会い」、「普段できないことの体験」が挙げられ、学校行事における活動が直接的な内容だけではなく、活動を通して得られる人間関係や出会いを中心として機能しているといった示唆を得ることができた。

なお、本研究の課題としては以下の3点が挙げられる。

まず、本研究では学校行事、中でも運動会と修学旅行に焦点を当てた研究のみに留まっているということである。学校行事以外の特別活動に関わる内容について同様の調査を実施し、児童たち自身が捉えている特別活動の意識を明らかにする必要があるだろう。

さらに、質問紙の項目においても不十分な点が見られた。質問紙の項目の洗練を図ると共に、自由記述による調査も充実させる必要があると言える。それによって、より詳細な分析が可能になると考えられる。

最後に、本研究の成果は、小学6年生の意識の実態を示すのみに留まっている。インタビュー等を活用し、さらなる深い分析を行うことが求められる。小学6年生のみではなく複数に渡る学年の調査を行うことで、より多様な学校行事の意義を見出すことが実現できると考えられる。



## 参考・引用文献

河本愛子「中学校教師の学校行事における関わりの質的検討：集団社会化理論の視座から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』55、217-226、2015年。

渡辺誠一「高専高学年における学校行事および学校生活に関するアンケートの実施結果」『長野工業高等専門学校紀要』49、1-7、2015年。

長谷川祐介「友人関係に及ぼす学校行事の影響に関する分析の試み」『教育実践総合センター紀要』大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センター、29巻、91-104、2012年。

玉井康之、久々江貴志「小規模校における学校行事と児童の意識：児童の興味から見た行事の意義」『僻地教育研究』49、北海道教育大学、55-61、1995年。

金子和宏、岩澤利子「特別活動 高学年のためのソーシャルスキル指導モデルの開発—ソーシャルスキルトレーニングと学校行事を一体化させた指導が学級生活満足度に及ぼす影響」『教育実践研究』19、上越教育大学学校教育実践研究センター、165-170、2009年。

中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』2016.12

文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』2008。